《研究ノート》

福岡県内出土天河石製玉類について

吉田 東明・比佐 陽一郎・松園 菜穂

はじめに

天河石（てんがせき・アマゾナイト）は微斜長石（$KAlS_3O_8$）の変種で青緑色の単結晶鉱物である。ブラジル、マダガスカル、ウラル、インドで産出することが知られている。日本国内では過去に採掘、加工され、宝石として一般に流通したことはないとされている。[1] 従って、国内の遺跡から出土した天河石製玉類はすべて外来系遺物であることが前提となる。

1　これまでの研究成果

朝鮮半島の考古学に関する研究成果では、天河石製玉類の出土は青銅器時代から初期鉄器時代に及び、原三国時代にもわずかに残るとされる。中でも青銅器時代においては、天河石製玉類と碧玉製管玉が時代を特徴づける玉であり、さらに天河石製の玉は一部の人にしか副葬されない稀少品であったことが確認されている。[2] 分布域は遼東地域から朝鮮半島北部・北部に近い嶺東地域、南部の一帯にまで及ぶ。[3] 天河石で製作される玉類には勾玉と丸玉・小玉が確認されており、管玉が製作されなかったのは、天河石の粒子が塊状で細長い形態の管玉をつくる素材として適切ではないことがその理由とされる。[4]

朝鮮半島内での天河石原石の原産地は、咸鏡南道端川や忠清南道丹陽ソウル冠岳山付近で確認されているようだが、詳細については不明である。玉作遺跡については、山清郡黙谷里遺跡や晋州大坪遺跡といった慶尚南道南江流域の遺跡が発掘調査によって確認されている。

日本列島出土勾玉を対象にした森貞次郎の型式分類[5]に基づき、朝鮮半島から出土した勾玉の検討を行った西谷正[6]や大坪志子[7]の検討を参照すると、天河石製勾玉は獣形、原始形、半月形、C字形、不定形に分類される。このことは一方で、弥生時代中期以降に日本列島で広く普及する定形勾玉や丁字頭勾玉は、天河石製勾玉には見られないことも暗に示唆している。これは、天河石製玉類の時期幅が青銅器時代から初期鉄器時代を中心とするという庄田の指摘、および朝鮮半島で勾玉が定形化するのは原三国時代に入ってからのこととする西谷の指摘とも符合する。

丸玉の型式分類については、断面の形状から胴が張った楕円形（円盤玉）、扁平な楕円形（球玉）、扁平な板状（円板玉）の三種類に区分した高旻廷の検討が参考になる。[8]

2　光岡辻ノ園遺跡出土勾玉

日本国内では、九州北部の玄界灘沿岸域を中心に天河石製玉類の出土例があることが以前から知られていた。国内では天河石を玉の素材として使用した形跡が認められないことと、朝鮮半島青銅器時代とほぼ同時期にあたる弥生時代早・前期の遺跡から出土していることから、天河石は弥生時代開始期に朝鮮半島から確実に搬入された渡来遺物として理解されてきた経緯がある。宗像市光岡辻ノ園遺跡から出土した勾玉は、その代表例の一つとしてこれまで取り扱われてきた。[9]

光岡辻ノ園遺跡出土勾玉については、整理・報告書作成段階で自然科学的調査が行われ、比重測定の数値や電子顕微鏡に付属する分析装置（ＥＰＭＡ）による材質分析で、珪素、アルミニウム、カリウムが特徴的に認められる結果から天河石製であるとされていた。しかし、今回あらためて実見してみたところ、天河石製とするのに大きな違和感があった。一つはその色調である。朝鮮半島の遺跡から出土する天河石製玉類は濃い青色や水色が通例で、明るく鮮やかな色調であることが多いが、本例はくすんだ緑灰色を基調として灰白色や黒色が斑状に混在しており、一般的な天河石製玉類の色調とは大きく異なる印象を受けた。もう一つはその形状である。朝鮮半島出土天河石製玉類の分類については先述のとおりだが、本例は勾玉と形容するのがためらわれるほどの独特な形状である。加えて、擦過による複数の線刻が施文されている点は、少なくとも他の天河石製勾玉に類例を見出すことができない。そこで、新たな手法も加え、再度自然科学的調査を実施した次第である。

調査は福岡市埋蔵文化財センターの機器類を用い、比重測定、蛍光Ｘ線分析、Ｘ線回折分析などを行った。蛍光Ｘ線分析は、試料にＸ線を照射し、試料に含まれる元素から生じる各元素に特有のエネルギー値を持つ二次Ｘ線＝蛍光Ｘ線を検出器で捉え、その元素の種類や量を調べる分析法である。Ｘ線回折分析は、試料にＸ線を照射することで、試料を構成する結晶から得られる回折Ｘ線を検出器で捉え、ピークとして表すものである。蛍光Ｘ線分析が含有元素の同定を行うのに対し、Ｘ線回折分析は結晶の種類や状態を知ることができる。ピークの同定は既知試料のデータベースと照合することで行う。各装置と分析条件等は次のとおり。

・エネルギー分散型微少部用蛍光Ｘ線分析装置（AMETEK・EDAX Orbis）：対陰極：ロジウム（Rh）／検出器：シリコンドリフト検出器／印加電圧：30kV・電流値：１０００μA／測定雰囲気：真空／測定範囲０・３㎜φ／測定時間１８０秒

・Ｘ線回折分析装置（Bruker-AXS・D8-DISCOVER）：対陰極：銅（Cu）／検出器：リアルタイム二次元検出器／印加電圧：40kV・電流値：40μA／測定角度13～77°／測定範囲０・５㎜φ／測定時間９００秒

まず蛍光Ｘ線分析では、検出強度の強い元素順に、ケイ素（Si）、カリウム（K）、アルミニウム（Al）、鉄（Fe）、チタン（Ti）、クロム（Cr）が認められた。確かにカリウムの検出は天河石の特徴の一つではあるが、これまでの経験上、天河石の場合、カリウムとルビジウム（Rb）以外、同定ができないピークが乱立する分析結果の特徴がある。しかし、本資料では、鉄やクロムなどが明確に元素として同定でき、ルビジウムのピークは微弱である。何より、クロムの検出は

クロム白雲母という結果に帰結するものである。X線回折分析でもこれを裏付けるように、Muscovite（白雲母）のデータに一致するピークが得られている。比重は今回測定では2・68で、前回の2・7と近似する結果となっている。クロム白雲母は2・8を超える数値を示すものが多く、それに対して天河石は2・5前後と低い数値となる。2・68という結果は、両者の中間的なものであり、ここからの判断は難しい。

いずれにしても、今日的な観点に基づく再調査の結果、光岡辻ノ園遺跡出土勾玉は、天河石製ではなくクロム白雲母製であることが判明した。このことを踏まえ、本例については以下のように整理する。

光岡辻ノ園遺跡の勾玉は、長さ1・35m、幅0・3m、深さ5cm程の小規模な溝状遺構SD2から出土した。共伴遺物が皆無であることに加え、調査区内には他に弥生時代中期末～後期初頭や後期終末の竪穴住居跡等が分布するが、これらはクロム白雲母製勾玉と直接関連しそうな時期の遺構ではない。従って、本例については共伴遺物による時期比定を行うことができない状況に置かれている。

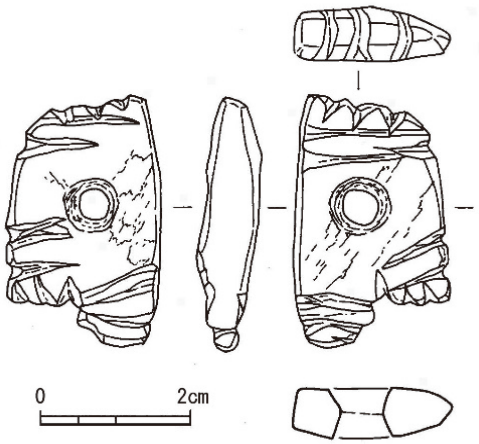

図1　光岡辻ノ園遺跡出土玉類（S=1/1）

形状に関しては、全長3・4cm、幅2・1cm、厚さ0・6cmを計測し、丸みのない扁平な板状を呈している。尾部と腹部の境には明瞭な屈曲があり、全体的な形状は腹部に突起のある獣形勾玉に近いといえる。中央には両面穿孔による直径0・4～0・7cmの円孔が一つある。表面は研磨されるが自然面を残し、光沢はほとんどない。頭部や腹部の下端には主軸と併行する方向に短い線刻が各三条加えられる。側面には主軸と直交する方向に線刻が加えられており、頭部側に二条、腹部に二条、尾部に三条が確認される。

これまでの研究により、クロム白雲母製玉類は縄文時代後期後葉から晩期前葉に九州で製作されたものとされており[10]、それに従えば本例もこの時期に九州で製作されたものとみるのが適当である。形態的特徴に関しては従来どおり獣形勾玉に区分されるのが妥当であろう。管見の範囲内に限れば、石材は異なるが宮崎県学頭遺跡の獣形勾玉（縄文時代後期後葉・硬玉製）は全体的な形状や複数の線刻を有する点で卑近な例として参考になる[11]。光岡辻ノ園遺跡出土勾玉については、縄文時代後期後葉から晩期前葉に製作されたクロム白雲母製獣形勾玉と位置付けることとしたい。

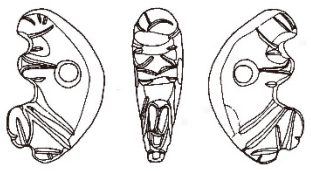
図2　学頭遺跡出土獣形勾玉

3　福岡県内出土天河石製玉類

今回の市史編纂に際して宗像市内から出土した玉類を実見したと

表１　福岡県内出土天河石製玉類一覧（番号は図３・４、写真の番号に対応）

番号	遺跡名	所在地	遺構	器種	時期	報告書
1	今川遺跡	福津市 宮司	採集（包含層下層：黒褐色砂層の可能性が高い）	勾玉	弥生時代前期	津屋崎町文化財調査報告書第4集 「今川遺跡」 1981津屋崎町教育委員会
2	夜臼・三代遺跡群	糟屋郡新宮町 大字下府・三代	三代貝塚付近精査中	勾玉	弥生時代前期	新宮町埋蔵文化財発掘調査報告書第10集 「夜臼・三代地区遺跡群　第5分冊」 1995新宮町教育委員会
3	有田遺跡第36次	福岡市早良区 小田部	2号甕棺墓上位の覆土	勾玉（半月形） 再加工品	弥生時代中期後半	福岡市埋蔵文化財調査報告書第96集 「有田・小田部第4集」 1983福岡市教育委員会
4	諸岡B遺跡第3～5次	福岡市博多区 諸岡	第6号竪穴	勾玉	弥生時代前期末	福岡市埋蔵文化財調査報告書第31集 「板付周辺遺跡調査報告書(2)」 1975福岡市教育委員会
5	三沢蓬ヶ浦遺跡	小郡市三沢	E地区2号住居跡床近くの覆土中	勾玉	弥生時代中期初頭	福岡県文化財調査報告書第66集 「三沢蓬ヶ浦遺跡」 1984福岡県教育委員会
6	大木遺跡	朝倉郡筑前町 篠隈	7号土壙墓No.8	勾玉	弥生時代前期	夜須町文化財調査報告書第35集 「大木遺跡」 1997夜須町教育委員会
7	長延9号墳	八女郡広川町 長延	横穴式石室	丸玉状 再加工品	古墳時代後期後半 ～終末期	広川町文化財調査報告書第4集 「上長延古墳群」 1985広川町教育委員会
8	今宿遺跡第5次	福岡市西区 今宿東	112号甕棺覆土上層	勾玉（欠損）	弥生時代前期後半	福岡市埋蔵文化財調査報告書第654集 「JR筑肥線複線化地内遺跡埋蔵文化財調査報告書」 2000福岡市教育委員会
9	観音浦古墳群観音浦南支群KS9号墳	糟屋郡宇美町 井野	横穴式石室	丸玉	古墳時代後期後半 ～終末期	「宇美観音浦」 1981宇美町教育委員会
10	牛頸中通10号墳	大野城市 牛頸	横穴式石室	丸玉	古墳時代終末期	大野城市文化財調査報告書第4集 「牛頸中通遺跡群」 1980大野城市教育委員会
11	千里遺跡第1次	福岡市西区 千里	5区SP5012（柱穴）	丸玉（欠損）	縄文時代晩期？	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1117集 「千里」 2011福岡市教育委員会
12	古野A1号墳	大野城市 乙金	横穴式石室	丸玉	古墳時代後期後半 ～終末期	九州縦貫自動車道関係 埋蔵文化財調査報告－Ⅸ－
13	上ヶ原10号墳	糟屋郡久山町 久原	横穴式石室	丸玉	古墳時代終末期	久山町文化財調査報告第13集 「上ヶ原古墳群」 2009久山町教育委員会
14	元岡・桑原遺跡群第42次	福岡市西区 元岡	D-3区周辺土器群9C	丸玉	弥生時代中期後半	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1275集 「元岡・桑原遺跡群24」 2015福岡市教育委員会
15	今光遺跡	那珂川市 今光	溝2	丸玉	古墳時代中期	「今光遺跡・地余遺跡」 1980東急不動産株式会社
16	今川遺跡	福津市 宮司	採集（包含層下層：黒褐色砂層の可能性が高い）	丸玉	弥生時代前期	津屋崎町文化財調査報告書第4集 「今川遺跡」 1981津屋崎町教育委員会
17	徳永A遺跡第7次	福岡市西区 徳永	谷北部Ⅳ層（包含層）	丸玉	古墳時代後期 ～終末	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1189集 「徳永A遺跡5」 2013福岡市教育委員会 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1227集 「徳永A遺跡6」 2014福岡市教育委員会
18	大木遺跡	朝倉郡筑前町 篠隈	7号土壙墓No.1	小玉	弥生時代前期	夜須町文化財調査報告書第35集 「大木遺跡」 1997夜須町教育委員会
19			7号土壙墓No.3	小玉		
20			7号土壙墓No.5	小玉		
21			7号土壙墓No.7	小玉		
22			7号土壙墓No.9	小玉		
23			7号土壙墓No.11	小玉		
24			7号土壙墓No.13	小玉		
25			7号土壙墓No.15	小玉		
26	安徳台遺跡群	那珂川市 安徳	18号住居跡	丸玉	弥生時代中期後半	那珂川町文化財調査報告書第67集 「安徳台遺跡群」 2006那珂川町教育委員会
27	免遺跡第3次	福岡市早良区 賀茂	B4グリッド3層（自然流路SD-02？・03 3層）	小玉（欠損）	弥生時代前期初頭	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1059集 「免遺跡2」 2009福岡市教育委員会
28	有田遺跡第35次	福岡市早良区 小田部	7号住居跡覆土	小玉	古墳時代前期？	福岡市埋蔵文化財調査報告書第173集 「有田・小田部第9集」 1988福岡市教育委員会
29	有田遺跡第106次	福岡市早良区 小田部	SC12（住居跡） 覆土	小玉	古墳時代後期後半？	福岡市埋蔵文化財調査報告書第651集 「有田・小田部第34集」 2000福岡市教育委員会
30	有田遺跡第152次	福岡市早良区 小田部	SC12（住居跡）	小玉	古墳時代後期後半？	福岡市埋蔵文化財調査報告書第265集 「有田・小田部第13集」 1991福岡市教育委員会
31	城ヶ谷19号墳	宗像市 大田原	横穴式石室	丸玉	古墳時代後期	「城ヶ谷古墳群」 1977クボタハウス株式会社・住友不動産株式会社
32	高畑遺跡第10次	福岡市博多区 板付	SD26	小玉	古墳時代中期	福岡市埋蔵文化財調査報告書第115集 「板付周辺遺跡調査報告書(10)」 1985福岡市教育委員会
33	雀居遺跡第18次	福岡市博多区 雀居	SS016北畔下	小玉	弥生時代前期 ～古代	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1388集 「雀居14」 2020福岡市教育委員会

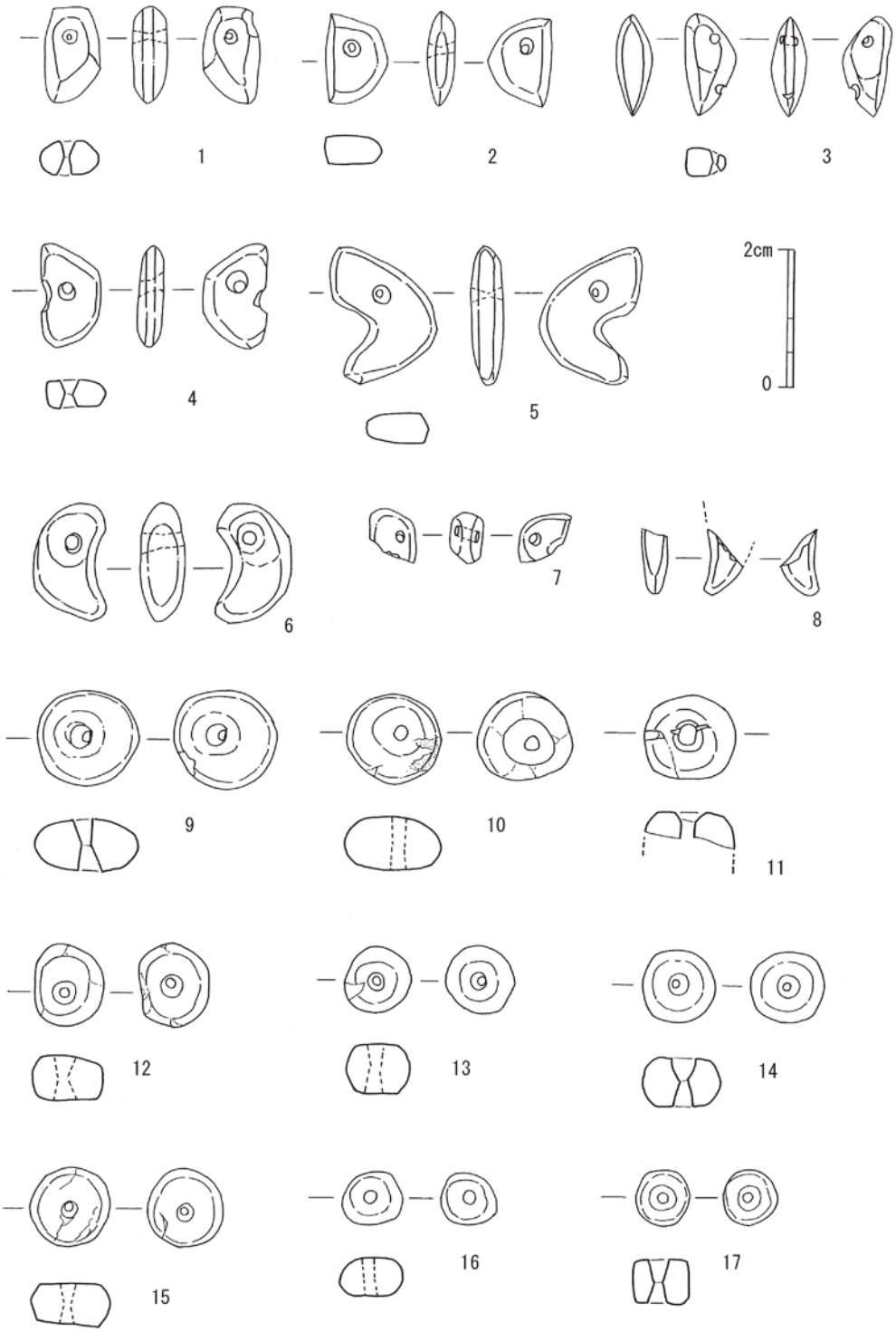

図３　福岡県内出土天河石製玉類１（S=1/1）

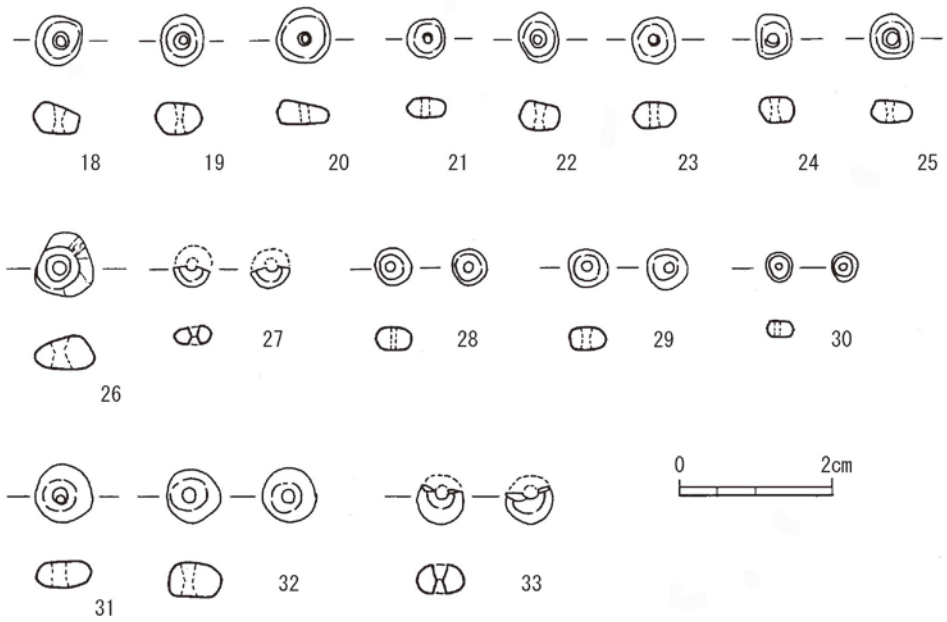

図４　福岡県内出土天河石製玉類２（S=1/1）

ころ、後期古墳である城ヶ谷19号墳出土品の中に天河石製と思われる玉類を１点確認した[12]（図４-31）。天河石製玉類については先述のとおり、朝鮮半島では青銅器時代から初期鉄器時代に盛行し、日本列島ではほぼ同時期の弥生時代早・前期に朝鮮半島から持ち込まれたものと理解されてきた。この理解に従えば、城ヶ谷19号墳出土品は、古墳の時期と天河石製玉類の時期とが大きく隔たっていることとなる。通常であれば、混入もしくは特異な事例として処理されそうなところである。

しかしながら近年、同じように玉類の製作時期と出土遺構の時期とが大きく隔たる事例が複数報告され、関心を集めている。そこで本例を契機として、福岡県内の遺跡から出土した天河石製玉類の報告事例と、肉眼観察によって天河石の可能性があると思われた事例について、福岡市埋蔵文化財センターにて自然科学的調査を行い石材の判別を行った。その結果、天河石製であることが判明した玉類が表１、図３・４ならびに写真である。

調査の手法は前章に示したとおりである。結果の判別も前の記述に一部重複するが、蛍光X線分析ではケイ素の他、カリウム、ルビジウムのピークが認められ、他、５～12keV付近に同定不能のピークが乱立する。今回、まとまった数の資料を分析した結果、細かく結果を見るとナトリウムの検出量や、同定不明ピークの検出箇所についての差異を指摘することができる。しかし、ナトリウムに関しては同一資料の分析箇所による違いであり、また不明ピークの検出は、そもそも検出原因の解明に至っておらず、分析による天河石の細分化は現状では難しい。また、X線回折分析では、普通に分析を行っ

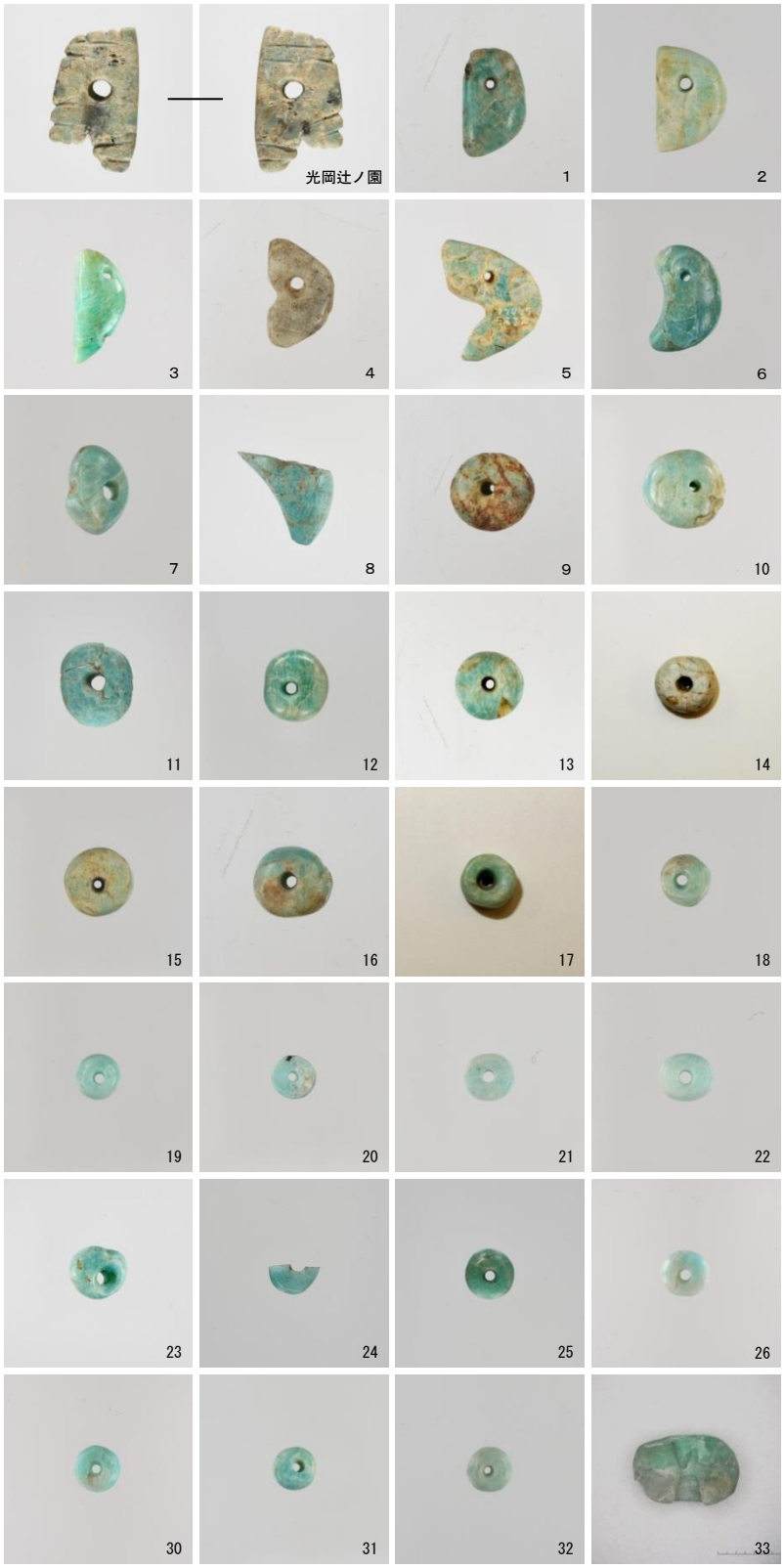

写真　福岡県内出土天河石製玉類（光岡辻ノ園遺跡を除く。番号は表１、図３・４の番号に対応）

ても単結晶のため、同定に必要なピークが十分に得られない。回転揺動などによって検出ピークを増やすことはできるが、微斜長石であるMicroclineの結晶データとは完全に一致せず、この分析方法での明確な同定は困難である。天河石の蛍光X線分析やX線回折を用いた分析による同定には、まだ課題が多く、比重測定、色調などの結果も合わせた総合的な判断が必要である。

現在までに科学的調査を行った福岡県内出土天河石製玉類は、21遺跡から出土した合計33点である。種類には勾玉と丸玉・小玉があり、勾玉は折損品・再加工品も含めて8点、丸玉・小玉は25点を数える。

4　天河石製玉類の形態的特徴

先述の分類に基づくと、勾玉は原始形勾玉1点（1）、半月形勾玉2点（2・3）、C字形勾玉2点（4・5）、不定形勾玉1点（6）に区分される。1は頭部と尾部の境が不明瞭だが、一側縁が湾曲した形状で原始形の特徴を有している。2は均整のとれた半月形である。3は背部に円孔状の抉りがあることから再加工品と認識される。現状では半月形に近い。4は腹部の抉りが浅く、体部は丸味の少ない扁平に近い形状である。頭部と尾部の大きさにはほとんど差がない。これに対して5は腹部の抉りが深く、頭部と尾部の形状も意図的に差異化が図られており、頭部は大きく尾部は尖り気味に整形される。体部に丸みがなく扁平なのは4と同様である。6は分類上不定形勾玉に区分されるが、丸みがあり均整のとれた形状である。7は折損後に端部を研磨した再加工品だが、本来は尾部が細長く尖った形状の勾玉だったものと思われる。8は頭部を欠損するが、尾部が長く尖った形状の勾玉と思われる。

これらの勾玉については、朝鮮半島出土勾玉の既存の分類に当てはめても違和感はない。穿孔はすべて両面穿孔によるもので、使用された穿孔具の形状に起因して、両端部の径が大きく孔径が小さなもの（1・2・4～6）と、両端部と孔径があまり変わらず小さなもの（3・7）とがある。両面穿孔であることは生産遺跡である晋州大坪遺跡の未成品分析結果とも共通するが、これについては破損のリスクを極力抑える工夫とする見解がある[13]。表面の研磨はどれも丁寧に行われており総じて光沢を帯びる。色調は鮮青色（3・6・8）、青白色（2・7）、青白色に半透明部分が斑状に含有（1・5）、青みのない灰色（4）がある。4は肉眼では天河石と認識することが難しい。

丸玉・小玉は径が8㎜以上のものを丸玉、それ以下のものを小玉とする。先述の分類を参考にすると、丸玉については、断面形状から胴が張った楕円形（9・10）、側面が丸みをもたず直線的で断面が方形に近い形状（17）、側面は丸味を帯び上下面は平坦な面をもつ形状（11～16）の三つに分類される。

対象が小さいため不明としたものもあるが、確認できた限りでは穿孔は両面穿孔による。両端部の径が大きなもの（9・11～15）と両端部と孔径があまり変わらず小さなもの（10・16）があるのは勾玉と同様である。研磨は10のように整形段階の稜線が残るもの、15のように自然面や剥離痕が残るものもあるが、他はほぼ平滑になるまで研磨され光沢を帯びている。色調は鮮青色（11）、青白色（9・

10・12～17）がある。

小玉は26のようにいびつな形状のものもあるが、概ね側面は丸味を帯び上下面は平坦に整形される。確認できた限りでは穿孔は両面穿孔を行っており、孔の断面形状が大きく二種類に分かれるのは小玉も同様である。研磨は総じて丁寧で光沢を帯び、色調は青白色で一見ガラスのようにも見える。

5　天河石製玉類の帰属時期

福岡県内出土天河石製玉類のうち、縄文時代晩期から弥生時代中期後半に属するとみられる天河石製玉類は、11遺跡から20点出土している（表1）。

最も古い時期のものは千里遺跡第1次調査で出土した縄文時代晩期前半とされる丸玉だが、共伴遺物が無く周囲の遺構から時期を類推したものであるため留意が必要である。大木遺跡7号土壙墓は周囲の土壙墓から出土した副葬小壺から弥生時代前期として問題なく、同様に免遺跡第3次B4グリッド第3層は、夜臼式土器を中心に板付Ⅰ式土器が少量共伴する状態であるため同時期とみて良いだろう。報文中では混入の可能性も指摘されているが、今宿遺跡第5次112号甕棺覆土上層から出土した勾玉は、棺内出土ではないとはいえ甕棺と大差ない時期と考えられる。これらの事例から、弥生時代早・前期には少なくとも天河石製玉類が搬入されていると考えて間違いない。

次に、安徳台遺跡群18号住居跡は図示された土器はすべて弥生時代中期後半のものであり、混入も考えにくい状態である。有田遺跡第36次出土勾玉は2号甕棺墓の墓壙上層から出土したため混入の可能性もあるが、周囲の遺構は古墳時代前期や中世であるため甕棺と同じ時期の弥生時代中期後半とみて良いだろう。元岡・桑原遺跡群第42次出土丸玉はほぼ弥生時代中期後半に限定される土器群9の中から出土したものであり、やはり同時期とみて良い。下限については弥生時代中期後半に置くことができる。

これらのことから、弥生時代に限って言えば、福岡県内の遺跡から出土した天河石製玉類の帰属時期は弥生時代早・前期から中期後半まで、とすることができる。このことは、朝鮮半島での天河石製玉類の出土は青銅器時代から初期鉄器時代に及び、原三国時代にもわずかに残るという先述の指摘事項と整合する。弥生時代に関しては、福岡県内の出土状況は朝鮮半島の動向を素直に反映したものといえる。

一方、今回注目したいのは古墳時代の遺構から出土した天河石製玉類12遺跡12点である。溝や住居跡覆土から出土したのであれば混入の可能性を排除できないが、古墳の横穴式石室から出土した例が6遺跡6点あり、これらすべてに対して混入の可能性を想定するのは現実的ではない。古墳時代後期から終末期にかけて天河石製玉類が流通し、使用されていたと考えるより他にない。

古墳時代の遺構から出土した天河石製玉類12点は、丸玉6点、小玉6点である。形態的特徴に乏しい丸玉や小玉であるため積極的根拠に欠けるが、全体の形状や穿孔技法は朝鮮半島青銅器時代の天河石製丸玉・小玉と大きく変わるところがない。また、朝鮮半島では三国時代の天河石製玉類製作は確認されておらず、これまでのとこ

ろ後述の例外を除いて使用も確認されていない。同様に、日本列島でも古墳時代に天河石製玉類を製作した痕跡は今のところ確認されていない。従って、古墳時代後期・終末期を７００年以上遡る頃に朝鮮半島やその近接地で製作された天河石製玉類が、長い期間が経過したのちに日本列島の古墳時代で使用されたと理解するのが妥当である。

天河石製玉類が出土した６遺跡は、どれも後期から終末期の群集墳中にある小規模円墳の一つであり、それぞれが帰属する古墳群中で、階層的に上位に位置付けられるような古墳ではない。外来系遺物の共伴もガラス製玉類を除けば他になく、被葬者に外来的要素を見出すことは難しい。従って、天河石製玉類を保有していることで階層的優位性や朝鮮半島との関連を示す根拠と見做すことは不適切である。朝鮮半島では一部の人にしか副葬されない稀少品であったとされるが[14]、古墳時代の天河石製玉類に限って言えば、そのように特別扱いされるような稀少品と認識することはできない。

６　伝世と再利用

古墳時代の玉類に見られる伝世あるいは再利用についていち早く指摘したのは、築上郡上毛町百留横穴墓群出土玉類の整理・検討を行い報告した大賀克彦である[15]。その後、近年特に玉類の伝世に関する報告が相次いでおり[16]〜[19]、特殊な事例とは呼べない状況になってきたことは注目に値する。

「伝世」という用語は、大切に扱われ長期にわたって途切れることなく意図的に伝えられたという意味合いを含むが、そのような行為や意図が延々数百年以上も続けられていたと考えることは現実的ではない。「いったん遺棄もしくは廃棄され」た対象が、「二次的に回収・使用されるプロセス」については、「伝世」ではない別の概念を用いて呼称した方が、当時の社会背景を検討し理解する上でより適切であるように思われる。そこで、製作から使用までが長期にわたって極端に離れており、二次的な使用としか考えられないこのような場合に対しては、「再利用」という用語を用いて概念上区別することとする。

現在までに伝世・再利用が指摘されている玉類には、縄文時代後・晩期に製作されたとされるヒスイ製丸玉やクロム白雲母製玉類、弥生時代中期に盛行する女代南Ｂ群碧玉製管玉、弥生時代後期〜古墳時代前期前半に製作されたとされる花仙山産碧玉製管玉がある。これらに今回の天河石製玉類が加わることになる。

それぞれの玉類は製作時期や場所が異なるが、伝世・再利用された時期が古墳時代後期・終末期に集中するという点では共通する。すなわち、古墳時代後期・終末期に、極端に古い時期の玉類が二次的に回収され、流通し、装飾品や副葬品に供されていたということ、およびそのような伝世・再利用はそれほど特異な例ではないということになる。

これらの伝世・再利用玉類が稀少価値としての特別な意味合いを有していたものではないということは、各玉類が天河石製玉類と同じように中小規模の群集墳や横穴墓から出土していることから理解される。むしろ、群集墳の爆発的増加に象徴される需要の拡大や、流通機構の変化に伴う玉類不足に対する代替品としての使用を考え

る方が適切である。また、弥生時代の天河石製玉類が福岡県では現在までに11遺跡から20点しか見つかっていないこと、および恐らく九州北部が最も出土数が多いであろうことを考慮すると、国内で「いったん遺棄もしくは廃棄」された天河石製玉類が古墳時代に「二次的に回収・使用」された可能性を完全に捨象できないにせよ、むしろ朝鮮半島などで二次的に回収されたものがその後日本国内に搬入され、使用された可能性を強く意識する必要があるだろう。傍証として、原三国時代以降使われることがないとされていた天河石製玉類が、韓国慶尚南道陜川郡玉田古墳群出土品中に含まれていたことが近年確認されている。[20] わずか一例だけなので今後はさらなる事例調査や検証作業が必要だが、玉類の伝世・再利用と、そこに社会的背景として浮かび上がる玉類の流通に関する問題は、日本列島内だけでなく朝鮮半島やその近接地にまで視野を広げる必要がある。

おわりに

本稿では宗像市に関連のある天河石製玉類について検討を行った。光岡辻ノ園遺跡出土勾玉については新たな自然科学的調査に基づいて再整理を行った。城ヶ谷19号墳出土丸玉については県内出土天河石製玉類の自然科学的調査および現況の整理を行った上で、伝世・再利用の問題に焦点を当てた。伝世・再利用については、玉類に対する古墳時代人の価値観を知ることができる興味深い内容であると同時に、当時の国内外の流通機構を検証する手掛かりともなりうる重要な事項である。

また、今回の一連の調査によって、福岡県内で多くの天河石事例を確認することができた。青味の強い特徴から見た目で判断できるものも多いが、中には一見すると硬玉と見間違えるような外観を呈するものや、ガラス玉と誤認されている事例もある。特徴を踏まえた観察と、自然科学的手法による分析を組み合わせた調査によって、福岡県以外でも朝鮮半島との交流が濃密な地域では特に事例が増加する可能性もある。今後の研究の深化が期待される。

一方で、示してきたように、石製玉類は石材種や形態的な特徴によって流通や帰属時期が判断され、これらが遺跡の評価にもつながっていく。入り口の石材同定を誤ると、その後の研究成果に大きく影響するため注意が必要である。ましてや、今回の調査では自然科学的な分析の結果が絶対ではないことも示された。これには当時、クロム白雲母の存在が考古資料において認知されていなかったことも原因の一つと考えられるが、今後も同様の事は十分に起こりえるものとして考えるべきであろう。結果の評価をより確度の高いものとするためにも、多角的な視点での調査と検証、そして経験の蓄積と振り返りが不可欠であることを肝に銘じたい。

【註】

(1)『カラー版　鉱物資源百科辞典』、日刊工業新聞社、一九九九

(2) 庄田慎矢「朝鮮半島の玉文化」『季刊考古学』第94号、雄山閣、二〇〇六

(3) 中村大介「朝鮮半島の玉文化研究の展望」『玉文化』第10号、日本玉文化研究会、二〇一三

(4) 李相吉「朝鮮半島の玉作―管玉製作技法を中心に―」『季刊考古学』

第94号、雄山閣、二〇〇六
(5) 森貞次郎「弥生勾玉考」『鏡山猛先生古稀記念　古文化論攷』、鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会、一九八〇
(6) 西谷正「朝鮮先史時代の勾玉」『森貞次郎博士古稀記念　古文化論集』上巻、森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会、一九八二
(7) 大坪志子「朝鮮半島の石製装身具」『文学部論叢』第73号歴史学篇、熊本大学文学会、二〇〇一
(8) 高旻廷「青銅器時代玉装身具の生産体系」『嶺南考古学会・九州考古学会　第12回　合同考古学大会　日韓の装身具』九州考古学会・嶺南考古学会、二〇一六
(9) 宗像市文化財調査報告書第43集『光岡辻ノ園』、宗像市教育委員会、一九九八
(10) 大坪志子『縄文玉文化の研究―九州ブランドから縄文文化の多様性を探る―』、雄山閣、二〇一五
(11) 宮崎県教育委員会『学頭遺跡・八児遺跡』県道高岡・郡司分線道路改良事業に伴う発掘調査報告書、一九九五
(12) クボタハウス株式会社・住友不動産株式会社『城ヶ谷古墳群』、一九七七
(13) 庄田慎矢「玉作から分業を考える―韓国晋州大坪遺跡の分析から―」『考古学研究』第50巻第4号、考古学研究会、二〇〇四
(14) 前掲（13）と同
(15) 大賀克彦「百留横穴墓群出土の玉類に関する諸問題」上毛町文化財調査報告書第13集『百留横穴墓群』、上毛町教育委員会、二〇一〇
(16) 比佐陽一郎「古代の玉に用いられる石材に関する新知見―福岡市内出土事例を中心として―」『実証の考古学―松藤和人先生退職記念論文集―』同志社大学考古学シリーズⅫ　別冊、同志社大学、二〇一八
(17) 比佐陽一郎「福岡市内出土石製玉類の用材について」『福岡市埋蔵文化財センター年報』第37号、福岡市教育委員会、二〇一八
(18) 『玉―古代を彩る至宝―』、古代歴史文化協議会、二〇一八
(19) 井谷朋子「古墳時代後期・終末期における玉類の「伝世」―島根県内出土の碧玉製管玉をてがかりに―」『島根県古代文化センター研究論集第21集　古墳時代の玉類の研究』、島根県古代文化センター、二〇一九
(20) 前掲（18）と同

（よしだとうめい　原始・古代部会／ひさよういちろう　福岡市埋蔵文化財センター／まつぞのなほ　福岡市埋蔵文化財センター）